

幼稚園四十年（六）

昭和年代

人形芝居の思い出

私が幼稚園に就職することになった大正十三年の三月頃、私は誰に聞いたのか、あるいは倉橋先生から見にこいといわれたのか、その辺のことはいま思い出そうとしても、いっこう記憶にないのだが、幼稚園（お茶の水附属幼稚園）に倉橋先生の演じられる人形芝居があるということを聞いたので、ひとりで附属の幼稚園に行ってみたことがあった。行つてはみたが、すべては済んでしまつて、人の集まりも、また使つたと思われる人形などの影もなく、空しく帰つた記憶がある。だから倉橋先生所演の人形芝居は遂に見ずじまいであつた。

私が人形芝居をはじめたのは、就職して二、三年ぐらい後の、日々の保育に少々ゆとりのできた昭和の初め頃だと思う。

菊池ふじの



人形芝居などというのには、あまりにもお粗末なものではあつたが、自分で人形をつくつたり人形芝居をする枠（つまり舞台）をこしらえたりして、何もかも自分で作り、自分で演じたのであつた。子どもたちの歓声に力づけられ、はげまされて、引きづりこまれるように熱中していった。

人形芝居とはどういうものか、人のするのを見たこと聞いたこともない。その頃よその幼稚園でやっていたものかどうかなども考えたこともなかった。ただやりたくてやった、まったくの自己流でやったのであつた。

舞台について

その当時は、幼稚園などで、人形芝居というものをやっていたものかどうか、そして、それに使う舞台などというものもあ

最初の手製の舞台（箱人形・布人形・土俗人形）



るものかどうか、人形も舞台も見当たらなかったといっているであろう。しかもその頃は、関東大震災のあとで、一切のものが鳥有に帰したあとだからかも知れないが……。

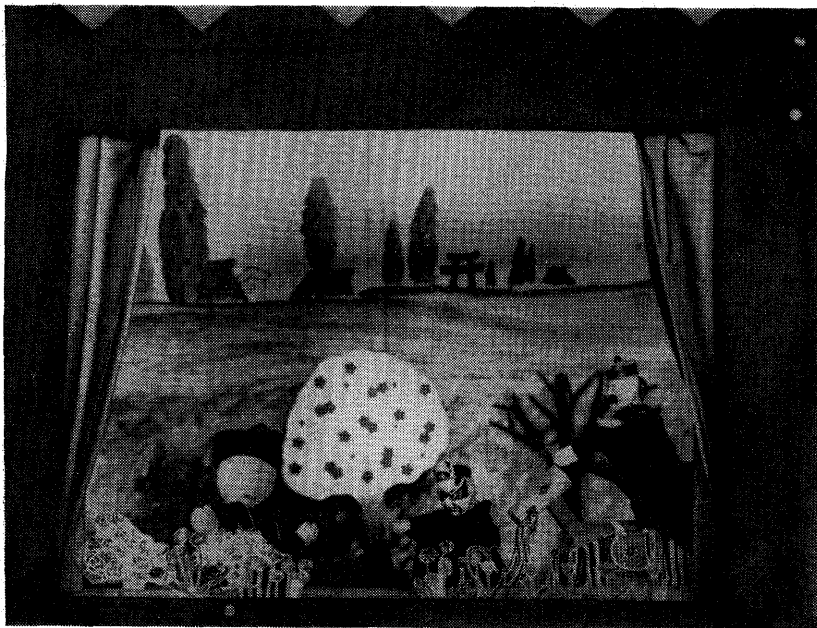
私はそういう舞台があるのかどうか、人に聞こうとも、また探そうともしなかった。買い求めるものなどとも思わないで、幼稚園の裏通りの本郷通りにある材木屋さんから、かんなんもかけていない荒けずりのままの巾三センチ、厚さ一センチぐらいの棒を買ってきて、自分で自己流の舞台をさっさと作った。床に立てるような大きなものは手におえないから、保育室においてある教師の教卓の上におく程度のものにした。

木目が荒けずりであるし、木の地色が白く見えるので舞台効果にも影響すると思ったので、木目がくしに黒のラシャ紙を貼ったりした。

それから舞台には幕が必要と考えた。両側に同時にさっと開くようにするにはどういうふうにしたらよいものかと、暫くは考えていたのであった。

ちょうどその当時、本校（女高師のこと）の講堂の正面壇上、中央の壁面には、御真影の奉安所があり、平素は固く閉ざされているが式の日には、式がはじまる前に事務長がうやうやしく登壇して、奉安所の幕の一方についている紐を引くと、幕はさっと両側に開いて、御真影が奉拝できるようになる装置になっていた。

手製の舞台で花咲翁の人形芝居



そこで日頃はめったに近づくことのできない場所ではあったが、事務長に依頼してこの装置を研究させてもらい、これを真似して自作の舞台に取り付けた。紐を引くと思いだおり幕が両側に開くようになったときは、くふうをしたり成就をしたり喜びをひとしお深く感じたものであった。

このような手製の、ごく粗末な舞台を使って人形芝居をしてゐるのをご覧になった倉橋先生は、あるとき

「フレーベル館を呼んで、人形芝居の舞台を作らせよう。だから、子どもが見るものとして、舞台の大ききとか、間口の高さや広さなど、どれぐらいが適当かを研究しておくように」とおっしゃった。

思いがけないお言葉にとでもうれしくなって、一生懸命に舞台の大ききや、間口の高さ広さなど研究し、フレーベル館に注文して作ったのが最初の舞台で、いまなお園の物置きに残っている。

こうして舞台はできるし、人形も、それから脚本らしいものもどんどんできてきたので、人形芝居は盛んになってくる一方であった。その頃は子ども向きの映画などもちろん皆無、スライドも紙芝居であったから、子どもたちは先生の演じる人形芝居を、この上もなく喜び楽しんでくれた。このよろこぶ顔を見ると先生としますます意欲が湧いてきて、次には何をしようかと考えをこらすのであった。

はじめはひとりで演じていたが、次第に隣りの組の先生、またその隣りの組というふうに合同し、先生の方も二、三人で演じるようになり、観客も二組、三組、おしまいは全園児を遊戯室に集めてするようになった。

こうなってくると、第一回目の舞台に対して不足な点が出てきた。それは一つは、この舞台では狭くなってきた。二、三人の先生が舞台の中に入って、しかもそちこちと動きまわらなければならぬので、とても狭くなってきた。

それから、家とか木とかその他の小道具を置く台の用をなすものが、舞台の間口の方にも奥の背景を貼るあたりにも欲しいと思うようになってきた。同時に、この台の直ぐ下部あたりに、取り替えの人形や小道具などを置く棚もあればなお結構と、いうことが感じられてきた。

それから、浦島さんの人形芝居をやるときなど、鯛や平目の往き交う海の中を、亀にのった浦島さんを進ませるとき、背景をまわるようにできるといいなと思い、それには背景を巻ける仕掛けにすると、この望みが実現できると考えた。

それから、舞台の中に入って演じているとき、熱中してくれる小さい観客の表情や様子が見たいものだ。見ることによって、いっそうファイトも湧いてくるので。それには、舞台の間口の下あたりに、のぞき穴をつけるとよい。そしてこののぞき穴は、お客さんからはわからないように、といったような、不

足点が考えられてきた。

そこで、以上の四つの点、即ち「狭い」、「小道具置き棚が欲しい」、「背景をまわるようにしたい」、「のぞき穴が欲しい」の希望を入れた第二代目の舞台をやはりフレイベル館に注文して作った。この舞台もいまだに残っていて時々使用している。

現代は、幼児向きの映画もたくさんあるし、幻灯、紙芝居、テレビ（カラーテレビも）ラジオなど、子どもたちの喜び楽しむものが昔とは比べものにならないほど潤沢になってきたので、園などで人形芝居を演じることは、稀になってきているようである。しかも一方ではバベット劇団とか、ブークとか木馬座など、いわば人形芝居の専門的なものが出現してきて、照明、音楽などを加えての精巧な演出をし、子どもたちを芸術的に酔わせている。

人形について

「人形芝居に使う人形の、表情や衣裳は、繊細なものよりはごく大まかで印象的なものがよい」と、いつか倉橋先生がおっしゃった。

このお話を伺ったとき、それならば、その人形は私たちにでも作れそうだと感じた。

小箱の人形

そこで最初は、小さい箱を顔にした小箱の人形を作った。



人形のいろいろ 左から箱人形・卵人形・木の人形・画用紙でつくった人形（かに）・布でつくった人形（ぶた）・土俗人形（さる）

これはあり合わせの小箱に、大まかに目やまゆ毛を書き入れ、鼻は、その当時手技の材料としてよく使ったきびがらを鼻のあるあたりへ挿し込んだり、あるいは貼りつけたりして鼻とした。またときには、画用紙で細長い立体的な三角をつくって鼻として貼ったりしたこともあった。頭は、茶や黒の毛糸などをふさふさとして髪としたりした。

このようにして頭や顔の部分ができあがると、次には、四センチぐらいの長さの画用紙を指がはいるぐらいの中穴にして二重や三重に巻き、これをとけないようにのりで貼りつけて頸をつくり、ここへ両手をつけた着物を縫いつけて、ギニョール式の指使い人形をつくりあげたのである。

着物の色合や柄模様、髪の毛や顔の表情などで、男女や年齢などの区別はほぼ判別できるようにした。

卵人形

その頃の一夏を房州の興津で過ごしたことがあった。砂浜にはいろいろな貝が落ちていたが、その中に角のような形の細長い貝があった。これも珍しくて拾えるだけ拾ってくるのであったが、こうして見ているうちに、この角貝は、何かになりそうだと思われてきた。

そうだ、卵の中味を吸って空にし、この殻に角貝を二本つけたら山羊の顔になるのではなからうかと思われ出した。そこで卵の一端に上手に小さい穴をあけ、ここから中の白味や黄味を

吸い出して中を空にした。このままの卵の殻では、さわればすぐ割れてしまうほどにもろいから、どうかしてもう少しよいにしようとかふうしたり、本をあさったりした。そのうちに、「かんぴ」という、日本紙をつるつるにしたような質の丈夫な紙のあることを思い出し、これを半センチ幅ぐらいの細いものに切り、これを中の穴になった卵の殻の外側に、幾重にも貼り重ねてみたら丈夫になるのではなからうかと考えていて早速やってみた。なるほど相当に丈夫になり、はらはらしないでもよくいくらい強くなったので、この卵人形で、七匹の子山羊の人形芝居をしたものであった。

布人形

これは布を縫い合わせて顔をつくり、目、鼻など刺繡でもって表わした。布も、麻の入ったものになると、毛ばたたなくて、しばらくはきれいに使える。またメリンスの布などで豚の顔をつくり、前に述べたような方式で体をつくって、三匹の仔豚の人形芝居をしたことであった。

木の人形

その頃は街の裏通りには下駄屋さんというのがあって、そこのご主人は厚地の前掛けをし、店先きで下駄造りをしていたものであった。下駄造りも、原木を大まかに下駄の大ききぐらいに切って高く積み重ねておき、それを暇にまかせては一足ずつこまかく削って下駄にし売るようにしていたようであった。

私はこの下駄屋さんへ行つて、くずの端木をもらい（下駄屋さんには、ただでくれた）これを切り出し小刀で人形の顔のように細工して人形を作ったものであった。下駄屋さんからもらうのは桐の木であるから、やわらかいので、私どもでも小刀で細工ができた。全体の中で鼻を浮き出すことはいくら細工がし易いといっても相当な労力や時日が必要なもので、私は顔の形だけを細工し、鼻は小さい木端を鼻の形に細工して、ばんじやくのりで貼りつけて鼻にした。

それから、その頃フレール館で売っていたおままごと道具の中のお鍋、取手のつるのついている木の鍋をこの人形にかぶせて落ちないように止め、鍋の帽子をエナメルで黄色に塗ったら、ちょうど鉄かぶとをかぶった兵隊さんができた。この兵隊さんに着せる服は、九段の僧行社へ行つて、カーキ色の軍服布を買いた求めた。それから玩具の機関銃を求めて、「爆弾三勇士」の人形芝居をしたことも、今なおありありと記憶に浮かんでくる。これは支那事変がはじまった後のことであるから、昭和十四、五年頃のことであろうか。

その後この桐の木でつくった兵隊さんを使って、戦争たけなわの頃、「出征」という人形芝居をしたこともあった。

新聞粘土の人形

支那事変がはじまってから、しばらくたってからのことだと思ふ。いろいろの物資を生かして使おうという気運が国内に盛

り上がってきた頃、幼稚園でも廃物とまではいかなくとも、物を粗末にしたりしないように、また死蔵してあるものを生かそうという気がまが人々の心の中に起こってきた。

この頃である、立体的なものをつくるのに、粘土では価格が相当高い、作ったものは重い上にこわれ易いなどの欠点があるということで、新聞粘土というのがはやりだした。新聞は戦争になってまでこの家にも豊富にあるものだし、これを生かそう、という主旨もあつたらう。

これは、新聞紙を細かくちぎってしばらく水に浸し、紙の繊維が崩れるようになったころ、火にかけてかきまわしてどろどろにする。そして相当やわらかにどろどろになった頃にしばらく、これにふのりを火にかけて溶いたものを、絞った新聞粘土に入れてよくまぜ、これを固めて任意の形のものを作り、これを太陽、あるいは火気に乾し、乾いたところで下地として白の泥絵具を塗り、乾いたらそれぞれの色の絵具で上塗りをして出来上がりとするのである。一時この方式で人形を作り、人形芝居に用いたものである。乾燥すると割合に軽いし、落としてもこわれないので重宝であつた。しかし、この新聞粘土は、ぼそぼそしているの繊維を必要とする作品には不向きである。

おままごとに使う野菜類（かぼちゃ、きゅうり、茄子、人参）菓子、おすし、ランチ、サンドイッチその他果物（みかん、りんご、ぶどう、梨、柿、栗、メロン）などを、子どもたちと共

にこの新聞粘土でつくり、採色してままごとによく使つたものであつたが、最近では保育用品のお店がこういう子どもの施設に用いられるような品物を、プラスチックなどで精巧に作つて販売しているので、苦勞なしに手に入れられるようになってゐる。

以上述べたように、いろいろの面にわたつて、手きぐりで自分たちで作つて、人形芝居に使つたものであつた。

その後保育用品店やその他こういう仕事をするところで、幼稚園や保育所では、人形芝居に用いる人形が必要であることを認識しだしたようで、いろいろの種類の人形の頭を、一個五十円とか八十円とかの値段で市販するようになった。

脚本について

はじめの頃は脚本などはなくて、独り語りといったようなものだった。

次の段階として、二、三人で演ずるようになって、前に大まかな打ち合わせはしておくが脚本なしで、教師めいめいが、その場に応じたセリフをいつていたのであつた。大体はスムーズにいったものであつたが、時としては、セリフの発言が重なつたり、とんちんかんなことになったりすることがあつたりして、舞台の中にもぐつていた教師同士がおかしくなつてしまつ

て笑いがとまらなくなることがよくあったものである。すると真剣に見てくれる大向うの小さい観客さんたちから、「先生、笑っちゃ駄目だよ!」と訴えられること屢々であった。

そこでやはり一定のセリフをきめておいて、それに忠実にしたがっていうようにしなければいけないということを思うようになってきた。

それから、一つのだしものに対しては、曲りなりにもセリフを書いておき、出演前によく読んでおくことにした。

こんなふうにして、次々と私的な脚本をこしらえて人形芝居を上演していたものである。

するとあるとき倉橋先生は、今までやったものをまとめて、人形芝居の脚本集を出版したらよい、とおっしゃった。

そこで、今まで人形芝居の仮の脚本をやっていたのが、同僚の徳久孝さんと私だったので、各々がまとめて協同出版した。

もちろん全部倉橋先生のお取りなしで出版になったことはいまでもない。昭和五年七月のことである。

序文に、「菊池さんも徳久さんももちろんシェイクスピアのような大劇作家ではない。ただの幼稚園の教師に過ぎない。しかし、幼稚園の人形芝居には、程よきまずさというものが必要だ。そのまずさをこの二人はもっている。」

という意味のことを書いて下さった。ほめられたのか、くさされたのかちょっとわからないけれど、自分の書いたものが徳

久さんと協同でやったものではあったけれど、一冊の本になったということに非常な喜びを感じたものだった。自分のこの上もない記念物であるのにその初版がいまは手許にもない。一冊五十銭定価のものでフレール館出版、倉橋惣三監修保育叢書の中の一部であった。

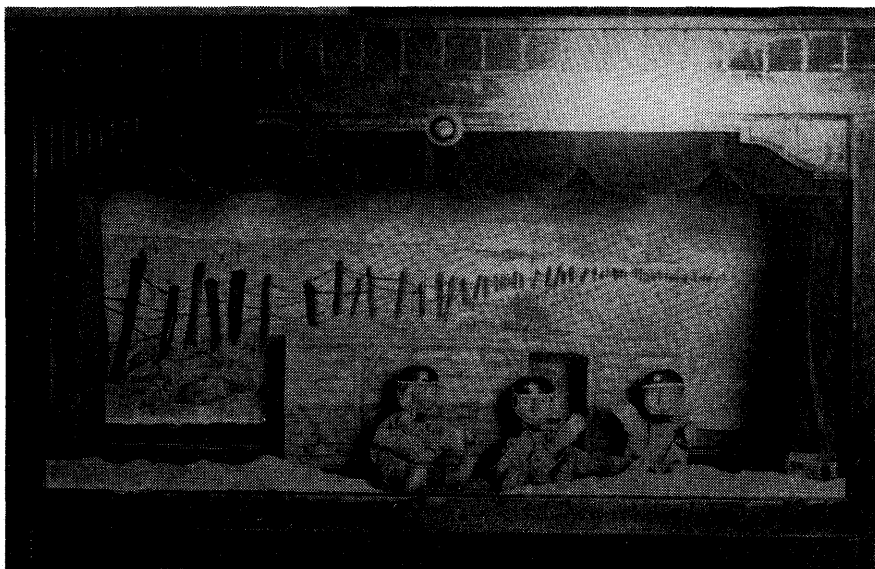
その後大東亜戦争が終わり、再び幼稚園が再開されるようになったとき、倉橋先生から、

「また人形芝居脚本集を再発行しよう」と申し渡された。徳久さんと二人で以前のを改訂増補した。このとき、倉橋先生から「前のとおりでなく、怠らずにいつの間にか積み重ねておいて、増補ということにしたことは感心だ」とお褒めを頂いたのをいまもってはっきりおぼえている。

いまふり返ってみて、この人形芝居については、いろいろの楽しい思い出がある。

園児たちに見せることは第一の楽しみであり、また人形芝居をすることの本命でもあるが、その他に、同じ学校内の附属の小学校との職員同士の懇親会にも演じたものだった。この人形芝居の一座は「お茶の水座」という名称をつけていた。倉橋座がしらから、私はふじの丈という芸名、同僚の徳久さんは孝之丞、同じく同僚の小島その子（今は宮崎その）さんはその八という芸名。そして上演の日には倉橋先生独特の字体で、細長い障子紙のような和紙に、これらの芸名が舞台の前方に貼り出さ

改良を加えた二代目の舞台・爆弾三勇士（兵隊は手づくりの木の人形）



れている。上演中、時折り小学校の先生方から、大向うよろしくのかけ声をいただいて、なおいつそう張り切るのだった。

またその当時は、夏季講習会の講師陣にわれわれ現場の者も一人か二人ぐらい加わらせるのが常であった。ある年は私に人形芝居の脚本化というようなことで講師になれという命令が降った。いやなことだったのだが、そう反抗もしないで、あの七月末の暑い日を憂うつの中にこの命を果たしたものだ。これも今となつては楽しい思い出の一つである。

さてこの人形芝居についての講習の際、その後篇として、実演をすることになった。ちょうど昭和七年の七月であった。その頃は、大東亜戦の前の支那事変当時で、私はちょうど爆弾三勇士の脚本を考えていたときだった。脚本の製作に当たっては先ず、事実を究めなければならない。そこで、神田の東京堂や三省堂の店頭でこの事実を究め、生命を鴻毛の軽きに比して出陣する勇士の心の中を思つて涙とどめあえず、という心境でこの三勇士の脚本を書き上げた。これを実演するについての練習のときは倉橋監督も舞台裏にもぐりこまれて指揮指導して下さった。アイスクリームを注文して届けさせては私たち出演者を励ましたり叱ったりなさった。

倉橋先生は一年志願兵の陸軍少尉どのでいらっしゃるので、軍記ものの指導には熱がこもり、また当を得たものだった。敬礼の仕方、報告や復誦の仕方などまさに堂に入っていた。その

ときのことである。三人の勇士が爆弾を詰めた筒を持って敵の鉄条網へ飛びこんで爆破し、通路を開き、そのおかげで味方の軍が敵陣に攻めこんで勝利をおさめるのであるが、この鉄条網へ飛び込むとき三勇士が「天皇陛下万歳!!」と叫び、とび込むのであるが、その万才!のセリフが、私たちの、あまり淡々として感動がこもっていない。こういうふうにいわなければ、とおっしゃって、ご自分で、「ばん ぎーい!!」と必死の声を張りあげて師範して下さった。あの声やご様子がいまでも目に浮かんでくる。これに対して、私はこんなお返事をした。

「先生!あそこは、悲しくて悲しくてとても先生のようにはいえないんです。あそこは、溢れる涙をこらえながら書いたところなんです。先生のように感慨こめていったら、泣けてしまっ

て声が出なくなるんです。」

「ああそうか!」と先生も感じていらした様子だった。

x x x

徳久さんと私の共著なる「人形芝居脚本集」の改訂増補(昭和二十五年七月発行)にいただいた倉橋先生の序文をいま改めて読み返してみたのであるが、先生の人形芝居に対してのお考えや、幼稚園教育要領の誕生後においても、益々自信をもってこれが幼稚園に取り入れられるべきを説かれている点など先生の気持ちやあの当時のことがわかるし、先生の文章は、読む人を努力なしに引きずりこむ魅力をもっているので、次に全文を

かかげさせていただくことにする。

初版にいただいた文章もいいものだったように思うが、いまはそれが無くなってしまっているのだ。……

菊池ふじの
徳久 孝 共著 人形芝居脚本集

序

本書の著者である菊池さんと徳久さんが、人形芝居の脚本というものを書きだしたのは、大正の末からの古いことである。ちょうどその頃、わたしは幼稚園に指使い人形芝居をとり入れようとして、小さな舞台で幼児たちをよろこばせ始めていた。今から思うと余り簡単なものだったが、こういう試みの多分最初のものであり、少なくとも、当時の幼稚園のきまりきった型をやわらげた効はあったと思う。それが趣旨でもあったのである。実はその以前からこの考えをもっていたが、あやつり式は、ちょっとむずかしいし、文楽式は大がかりだし、といって頭と手足位は動かないとおもしろくない。そこで昔から土俗玩具にある首人形へ目をつけて、それに外国でみて来た例を加えて工夫した。そうして、お茶の水人形座の看板をかけて毎夏の保育講習会にまでもちだした。やがて自分は舞台監督の方にまわって、実演は先生方に譲ったら、さすがにその方がうまい。なかにも本家出藍の評判の高かったのが、菊・徳の両ハナガタであった。

そのうち、急速に保育界にひろがって脚本集の注文がおり、実演者兼座付作者として書きおろして貰ったのが、両ハナガタ著作の旧版、「人形芝居脚本集」であった。これまた大うけで、先ず人形芝居のシナリオの定本ということになった。それを増補改訂したのが此の本である。その後新しいいいシナリオの次々に出たことを喜ぶとともに、なまかうちでは家元版として、近松、竹田、シェイクスピアに列べて自讃している。

人形芝居の保育価値については、今日ではもう説明する必要もない。舞台の前に集まる可愛い幼児たちの輝やく目を見ただけで、それははつきりしている。ただ新版御披露の口上のついでに、お茶の水座伝統の芸風とでもいうところを、二、三申し述べてみよう。

その一、幼稚園の人形芝居は、どこまでもマジメのものであること。決して余興でも遊芸でもない。昔流の保育項目ではないが、新保育要領でれっきとした保育内容の一つになっている。筋も演出も、戯れのじょうだん半分であってはならない。

その二、演出は十分気を入れ、観せる前に一応の稽古もいること。その場の即興で、口から出まかせ、指の動き放題といったふうのことは以ってのほかである。型のきまった歌舞伎というわけではないが、少なくとも一つの筋はいつも変わらぬ演出であってほしい。

その三、わるふざけは禁もつのこと。喜劇もよしユーモアも

大切だが、前うけ一方の茶番狂言は厳禁である。子どもなりにいろいろの情緒をはたらかせるのが劇の特色なのに、げらげら笑いだけは愚劇であり、子どもをも愚にする。

その四、お談義はなおさら禁もつのこと。劇は観賞させるべきもの、興味に楽しませるものである。教えられたり訓されたりにしているとあらわに気がついては観劇の味はなくなる。人形の芸によって感ずべきところは感じさせられ、意識の奥で考えさせられているのに、ベシ、ベカラズではつきりさせられては興がさめる。

その五、すべてあっさり運ぶこと、折角人形がしぐさをし、せりふをいい、小さい観客が活発な想像をはたかせているのに、その上に説明をしたり、注釈を加えたり、甚しいのは舞台の下から演出者の感想が飛びだしたり、そういう余計の挿入物は余計であり、邪魔である。幕がしまってからまで、あれこれの結論は一層迷惑である。

最後にもう一つ何より一番大切なのは、演出者が先ず劇中の心になりきらなくてはならぬということ、それには、自ら興に乗らなかつたり舞台裏に入ってから脚本を迫り迫り演出するといったようなことでは、人形は決して活きない。

どうぞ、この脚本集が真に人形を活かすために用いられんことを。
昭和二十五年七月

倉橋惣三記

(お茶の水女子大学附属幼稚園)